

## 『実例詳解古典文法総覧』補遺稿

連載第 49 回 第 11.1.10.1 節

2020 年 1 月 1 日

小 田 勝

明けましておめでとうございます。連載 3 年目に入りました。本年もおつきあいくださいましたら、ありがたく存じます。

前回の補遺稿で、「この補遺稿は、2 年で 114 頁に達した。」と書いて、来し方に思いを馳せなどしたのですが、読者の方から和泉書院宛てに、「56 頁が欠落している」とのご指摘を（ご質問の形で）頂戴いたしました。たしかに 55 頁（補遺稿第 24 回の終わり）の次（第 25 回の始まり）を「57 頁」と表示してしまっておりました。全くの不注意によるものです。丁寧に読んでくださり、心から感謝いたします。

さて、歳晩も近づいた頃、SNS 上で、「古典文の 1 文節は最大何語か」という問題が話題になっていて、私も大いに興味を引かれた。出題者の先生はコンピュータを駆使して正解をお持ちのようであるから、私はひたすら思考のみによって、この問題に挑戦してみようと思う（ついでに書くと、本書『実例詳解古典文法総覧』は、この規模のものとしては、コーパスを全く利用しないで作成された、最後の古典文法書になるだろうと思う。原稿執筆時には JapanKnowledge も使わなかった）。それでは、かつての月刊『言語』誌上の「チャレンジコーナー」よろしく、私なりの「答案」を書いてみることにする。私は上代・中世・漢文訓読体の文章の実態に暗いから、中古和文という想定で考える。

---

①まず助動詞から。事実として、私が用例をもっている助動詞接続の最大数は 5 語であって、私はその用例を 4 例知っている（「せ-たり-ける-なり-けり」蜻蛉日記・新全集 236 頁、「に-たり-ける-な-めり」能因本枕草子・完訳日本の古典『枕草子①』24 頁〔本書 69 頁、124 頁〕、「れ-に-ける-な-めり」愚管抄・大系 180 頁、「れ-たり-ける-な-めり」十六夜日記・新全集 299 頁）。だから実例は無いものの、助動詞が 6 語以上接続し得るかを（思考実験として）考えることになる。

②さて、助動詞を、動詞に近い方から、述語に近い方までずらりと並べたい。まず、

動詞に近い方であるが、「させ-らる」という接続は中古では不可である（補遺稿第6回）。「られ-さす」は可だが、「られ-さす」の「さす」は必ず尊敬であるから、その下に敬語の補助動詞が必要となって、「られ-させ」→「給ふ」で終了してしまう（「さす」は2回使えるが、これも「させ-させ」→「給ふ」で終わりになる。「らる」を2回使った「歴々の一門の人々討たれ-られ」（天草版平家4。受身+尊敬）なら下に続けられるが、この形は中古には存しない）。だから、「らる・さす」は、どちらか1つしか選べない。

③動詞から遠い方について。断定「なり」に下接する「む・まし・じ・けむ・らむ・らし・めり・終止なり」は相互に承接しないから（本書75頁）、この中からは1つしか選べない。

④さらに③で1つを選んでしまうと、「き・けり」は推量の助動詞を下接できないから、この上には「て-けり」とか「に-き」のような複合時制をおくことができなくなる。

⑤以上の②～④の挟み撃ちによって、存外助動詞の接続数は圧迫されるのである。

⑥…ということで、「裏ワザ」を使おうと思う。裏技は2つ考えられて、一つは④の制約を打ち破ることである。「き・けり」は推量の助動詞を下接できないのだが、断定「なり」を挟むと「ける-な-めり」のような推量形、「し-なり-けり」のような気づきの形をもつことができる（小田勝2019）。①の“実例”もみなこの裏技の形である。だからこの形の上に助動詞を並べて、例えば「られ-ぬ-べかり-し-なり-けり」（キット自然ト…サレルニ違イナカッタノダッタ）や「られ-に-たり-ける-な-めり」（自然ト…サレテシマッテイタヨウデアル。「に-たり-けり」の実例は本書124頁）のような6語の接続は可能ではなかろうかと思う。

⑦裏技のその2は、1形式で3語稼げる「ける-なり-けり」（本書75頁）を使おうというものだが、この上に例えば「ぬ-べし」を置けば、「ぬ」の上には「らる」しか来ないから、結局⑥と同じような句型（「られ-ぬ-べかり-ける-なり-けり」）しか得られない（漢文訓読体の文章なら「ざる-べから-ず（…シナケレバナラナイ）」も使い得るが）。

⑧以上のことから、助動詞の接続形式に関して、次の予想（小田予想）が立てられる。

小田予想：中古和文における5語以上の助動詞の連続形式は、必ず※を含む。

{けり／き<sup>（／φ）</sup>} + 断定「なり」 + {推量／けり<sup>（／φ）</sup>} …※

（「（ら）る」で始まる連続形式に限り、左右のどちらかはφにできる）

（※を含まない、5語以上の助動詞の連続形式は作ることができない）

⑨次に、助詞の方である。助詞の連続で、実例として私が用例を知っている最大数は

「から-の-を-だに-と」(本書15頁)の5語であるが、これは使えない。助動詞に助詞を付けて最長にするわけだから、3語が最大の文末助詞(「ぞ-かし-な」)よりも、助動詞を一度引用の「と」で受けて関係助詞で続けた方が得策だろう。関係助詞は「第1種副助詞+格助詞+第2種副助詞+係助詞」の順に並ぶから、これを使い、係助詞は「こそ-は」として語数を稼ごう。例えば「と-ばかり-を-だに-こそ-は」(…トセメテソレダケデモ。「と-ばかり-を-こそ」の実例は本書15頁)のような形が作られる。

⑩以上、私が机上で考えた助動詞・助詞の最大接続は、例えば次のようなものである。

動詞-られ-ぬ-べかり-し-なり-けり-と-ばかり-を-だに-こそ-は

(訳：きっと自然と…されるに違いなかったのだったとせめてそれだけでも)

小田の解答： 1文節の最大語数=13語

※上記は接続数の上限を証明したものではない。しかし自然言語として、これ以上の拡張を考えるのは無意味であろう。例えば中世語ということにして、下記のような形を無理に作るのは、文語を愛する者として、決して気持ちの良いものではない。

動詞-させ-られ-つ-べかり-し-なり-けり-な-と-なむ-と-ばかり-を-だに-こそ-は-よ-な  
(19語) [この場合の「させ」は使役か尊敬、「られ」は必ず尊敬]

(2019年12月19日記之)

さて、連載の続きは、318頁「11.1.10.1 -さ」からであった。形容動詞の語幹に付いた例があげられていなかったのので、ここに追加する。

- ・いとおほどかなる貴さは(源・東屋)
- ・悲しげさの慰めがたげに漏り聞こゆる気色(源・賢木)
- ・この姫君(=玉鬘)の御さまのにほひやかげさを[源氏ハ]思し出でられて(源・胡蝶)

次例は、漢語の形容動詞語幹に付いた例である。

- ・人しもこそあれ、宗景にしも仰せらるる面目さよ。(承久記)

また、用例(6)の類例をあげる。

- ・栄ゆる今日のあやに貴さ(万4254)
- ・故郷の花をも思ふ山桜散るを身捨てて帰りがたさよ(公任集)
- ・さすが思ひなれにしことのみ忘れがたさ(建礼門院右京大夫集・詞書)

[引用文献追加] 小田勝 2019「中古和文における3語以上の助動詞の接続について」『表現研究』110